

第5回 腹証奇覧・奇覧翼を読む

芍薬甘草湯他

診方§四診

峯 尚志



今回学ぶ処方

(○は文礼の●は叔虎の解説)

○●芍薬甘草湯、芍薬甘草附子湯

○呉茱萸湯

●当帰四逆湯、当帰四逆加呉茱萸生姜湯

芍薬甘草湯

芍薬 6, 甘草 6

応用と薬理

1 鎮痙作用

薬理) 芍薬の Ca^{2+} 拮抗作用によるカルシウムイオンの制御と甘草のグリシリチンによるカリウムイオンの制御とのカップリングに基づく。

応用) こむらがえり

坐骨神経痛、下肢痛

腹痛証、尿管結石の痛み

2 ホルモンに対する作用

薬理) 血中テストステロン・プロラクチン・LHの低下作用の報告

応用) 多嚢胞性卵巣症候群にクロミフェンと芍薬甘草との併用療法による不妊治療



芍薬甘草湯の腹証

拘攣が目標となる

○文礼の芍薬甘草湯

図のごとく腹底引っ張るものあり、
また拘（かか）わるものあり
指頭をもって軽く按してこれを知る
拘（かか）わるものは拘攣にして
引っ張るものは急迫なり
芍薬は拘攣を治し、甘草は急迫を治す
あるいは腰脚に引き攣り、
あるいは手足に引き攣りて痛むものこの証多し
また世にいう積聚なるものにもこの証多し
何病を問わず拘攣急迫するものはこの方を持ちうべし

図ノゴトク、腹底^{スウライ}ヒツハルモノアリ、又カ、ハルモ



●叔虎の芍薬甘草湯

右図のごとく、腹二行通り、
内外上下に引きはりたる筋ありて
これを按するに強し
或いは脚脛、或いは手臂攣急して伸びがたく
或いは手足の患なしと雖も
腹皮攣急して腹痛するものあり
小建中湯、桂枝加芍薬湯の腹証に似たりと
雖も、彼は桂枝を主として
氣上衝等の証あること前に愚論するがごとし
この方はただ筋脈の攣急を治するを主とするのみ



1

芍薬甘草湯の陰と陽

2

芍薬甘草湯の陽

太陽膀胱経である

腓腹筋の拘攣に著効

骨格筋の拘攣を治す

3

芍薬甘草湯の陰

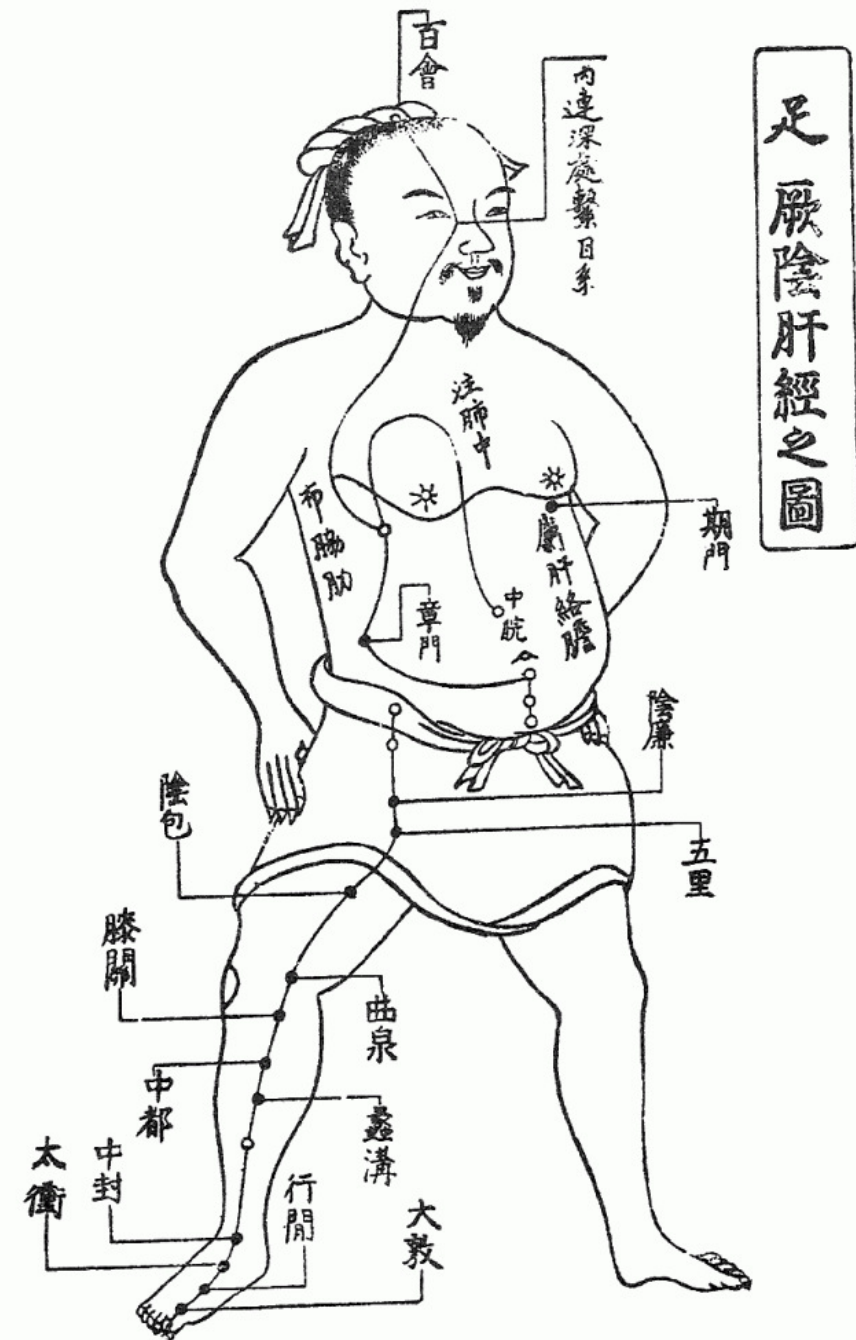
芍薬甘草湯は

陰経の拘攣を治す

平滑筋の拘攣を治す

肝は筋（すじ）を主る厥陰肝
経の痛みにも応用される芍薬
甘草湯は即ち去杖湯なり

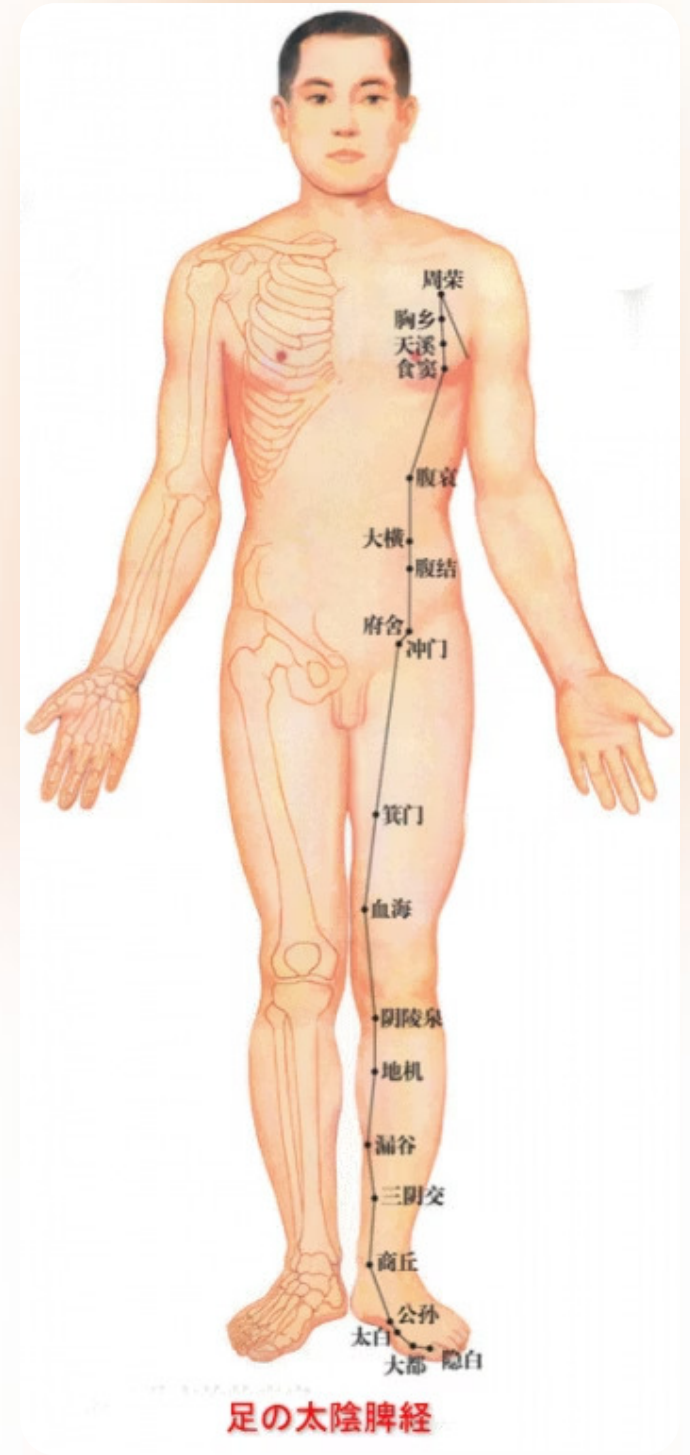
芍薬甘草湯は太陰脾経にも作
用する



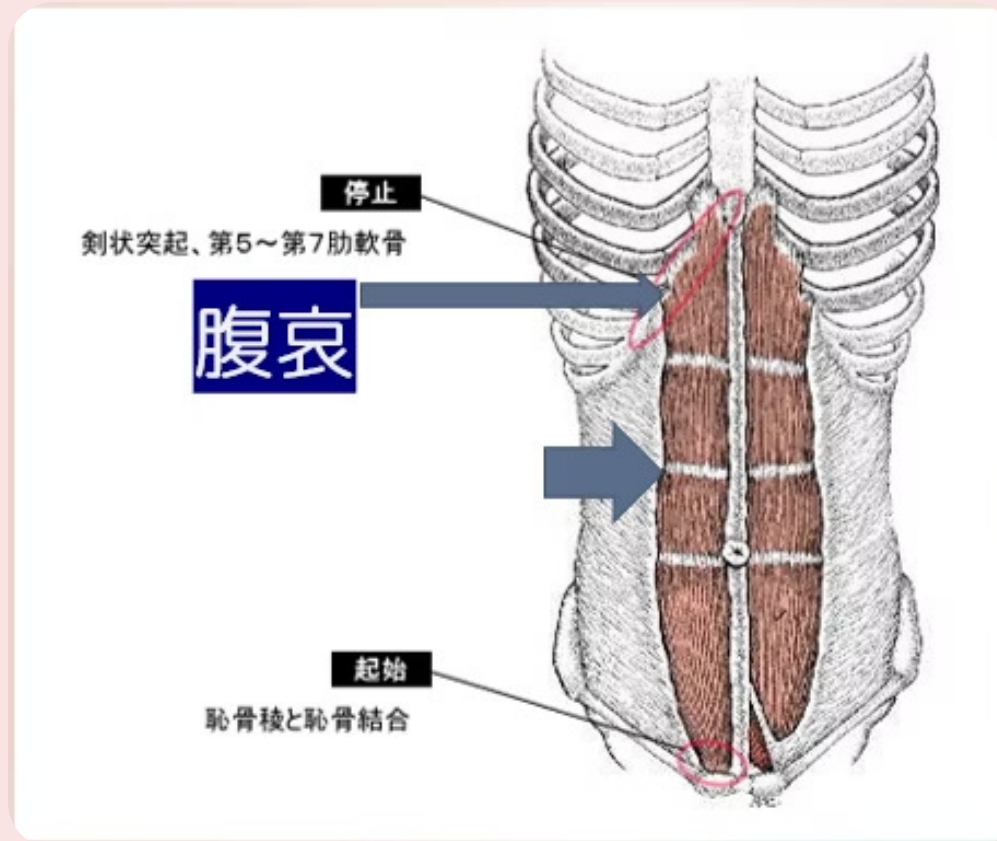
叔虎の図をよくみると拘攣の場所は太陰脾系をあらわす



脾は肌肉を主る



腹部で拘攣しているのは腹直筋の外側部分



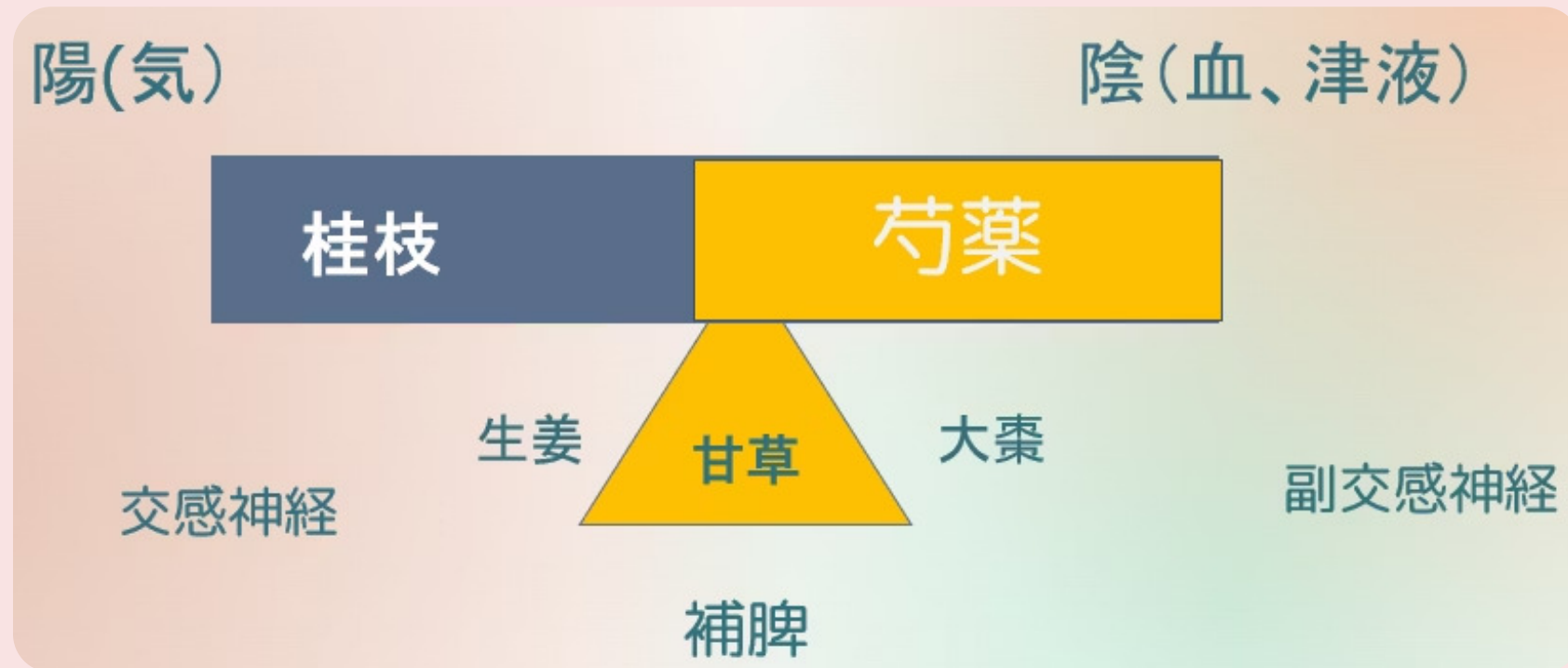
陰陽ともに作用する芍薬甘草湯

- 芍薬甘草湯は陽である骨格筋の攣縮を緩和すると同時に、陰である腸管平滑筋の拘攣も緩和する。
- 叔虎の図は、足は三陰交、鼠径部は府舎、腹は腹哀、脇は周営という脾系のラインの拘縮を示している。
- 肝は筋を主る、脾は肌肉をつかさどる。というように、筋肉の拘攣において重要なのは陰経である肝経と脾系。
- 筋肉の緊張を主る肝血が不足により肝陽が上抗すると木克土で脾系である肌肉が拘攣することとなる。

漢方処方薬は薬味の数が少なくなるほど作用が強くなり
急性の症状を緩和する

長期連用には適さない

桂枝湯は陰陽の調和 芍薬甘草湯は陰を補い急迫を治す



芍薬甘草附子湯

三和 芍薬甘草附子湯エキス4.5g

芍薬 5, 甘草 5, 附子 1

加齢により腎陽が虚し手足が冷えて引き攣り屈伸しがたく痛むもの

治験例が多いのは坐骨神経痛

呉茱萸湯

呉茱萸湯方

呉茱萸、生姜、人參、大棗

胃寒の痰濁上逆による嘔吐を治す

呉茱萸は温肝、温胃散寒で肝を暖めて肝の疏泄を助け、
胃中の清陽を登らせ濁陰を下降する

生姜は温中止嘔

人參大棗は温中補虚

主薬は呉茱萸

- ミカン科のニセゴシュユ、ホンゴシュユの未成熟果実
- 性味：辛、苦、熱、小毒
- 帰経：肝、腎、脾、胃
- 効能：暖肝、散寒止痛、解気止痛、温中助陽で五更瀉を治す
- 呉茱萸は辛散苦降・大熱燥烈で、疏肝下気に長じ、
- 温中して肝胃を和し、
- 散寒燥湿して脾腎の陽を助ける



寒気は腸胃に客すれば、厥逆して上に出ず故に痛み て嘔するなり『素問拳痛篇』

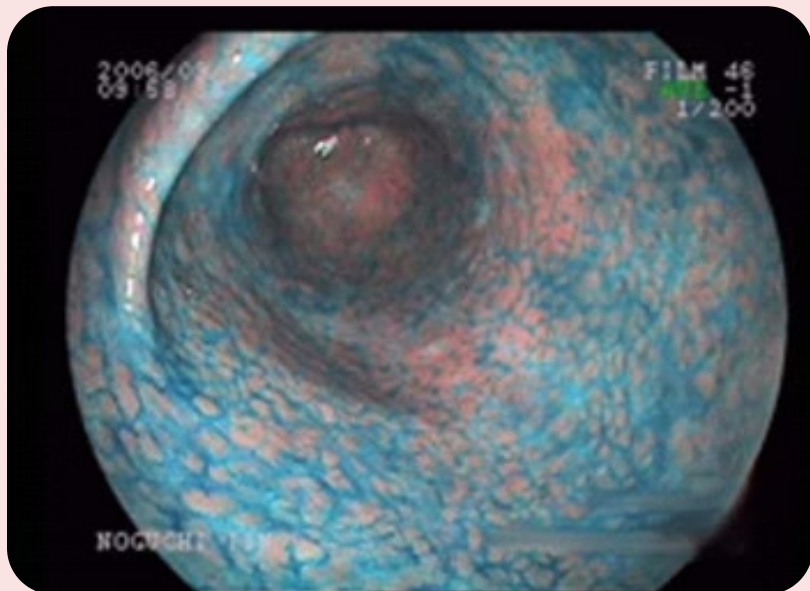
胃寒→温中降逆

食べると嘔気、嘔吐、心下痞

肝寒犯胃→暖肝散寒

胸やけ、吞酸、流涎、頭頂部頭痛、手足冷

胃寒の正体と呉茱萸



胃が冷えて悪心、嘔吐をきたす状態

胃寒の胃は、胃壁の緊張がゆるみ、蠕動運動が低下して、冷えて血流が悪くなり、胃液の分泌もわるくなり
飲食物を消化し、小腸に送りこむ力が弱く、逆流して悪心・嘔吐をきたすこととなる。

呉茱萸のエポジアミンは唐辛子のカプサイシンと同じように、TRPV1を刺激して、胃の血流を増やし、胃粘膜を刺激して、粘液の分泌を促進し、胃壁に適度な緊張を保たせ上から下への蠕動運動を助けている。

呉茱萸湯に含まれるサイクリックGMPも消化管の平滑筋の緊張を高めピロリ菌にも効果があり萎縮性胃炎にも有効と考えられる。

呉茱萸湯の応用

- 片頭痛、緊張性頭痛、薬物依存性頭痛
- 原因不明の嘔気、嘔吐症
- ヘリコバクター感染性胃炎
- 萎縮性胃炎（久寒：慢性に経過した胃寒）

呉茱萸湯は肝経に作用するため疏肝解鬱の柴胡剤との鑑別が難しい

肝鬱か胃寒か症例を通して考える

症例 43才女性

主訴) 片頭痛、下痢、月経前後の不調、右手のしびれ

職業) 放課後デイサービス発達障害児の介護支援

現病歴) 以下の症状で近医内科より紹介来院

10代からの片頭痛

月経前後、雨の前に増悪

10年前からの下痢

一番ひどいときは失神するくらいの痛み。1時間おきに下痢。

1年前から右手のしびれ

仕事で子供にはげしく手を引っ張れてから痛みを自覚

頭痛について

冷え性で胃腸は弱く冷えると下痢する。食後眠くなる

頭痛の場所は額の上から頭頂部

頭痛の性状は、ボールが膨らみ縮むような拍動性の痛み

持続時間は、ひどいときは一日中、数日続くこともある

軽めの時は、朝に少し重たい感じが昼から午後にかけて痛くなる。

翌朝はすっきりと何事もなかったようなこともあるが、夜を徹して朝になっても痛いこともある

頭痛時は光が苦手で、暗い部屋の中にずっといたい感じ、閃輝暗点はなし

頭痛時は嘔気が強く、食事は食べても吐く

頭痛のあとしばしば腹痛下痢を起こす

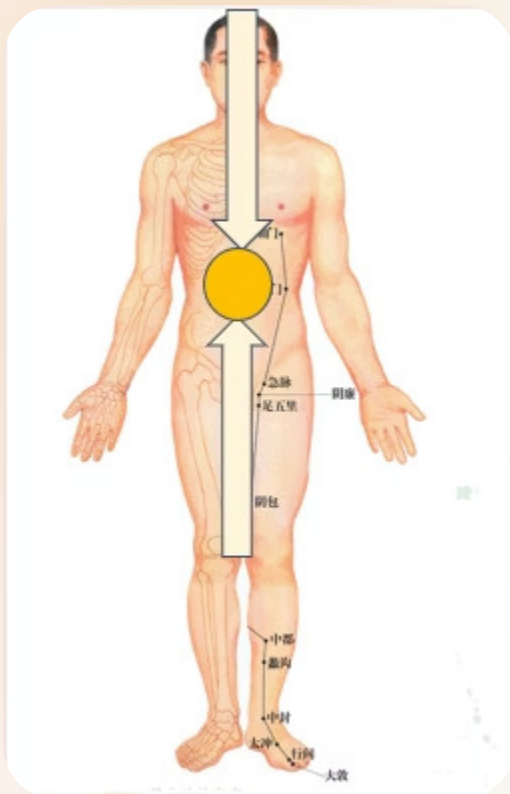
経過

以上の所見より胃寒水滯として呉茱萸湯エキス 5 g 分 2 と胃苓湯エキス 5 g 分 2 を処方、この処方で頭痛と下痢の頻度と程度が劇的に改善した。

鎮痛剤はその時だけ少し効いて頭痛が軽減されるが、次に飲むときはさらに頭痛が強くなり、もっと多い量を飲まないと効かなくなるという恐怖がある。

呉茱萸湯を飲むと、その時の頭痛が軽減されると同時に、次の頭痛まで軽くなっているのがわかり、呉茱萸湯が片頭痛の病態そのものに効いているという安心感があり、これから悪くなってゆくという恐怖感がなくなる。

頭痛のあとは、必ず腹痛下痢になるがそれも軽減して体力の消耗も抑えられる。



呉茱萸は肝気を 暖め胃に収める

裏寒により上昇した濁陰を降ろし頭痛を収める

胃寒による心下部痛
嘔気、嘔吐を収める

裏寒による下痢（下陷）を収める

文礼がいうように肝鬱気滞の
柴胡証との鑑別が必要な場合がある

3 か月後の所見

柴胡証を疑う

病状の変化

呉茱萸湯を毎日飲んでいるおかげで、片頭痛の程度はひどいときの3割くらいに改善している。

ところが、1年前に障害児の介護で受けたむち打ち症状が軽減していたのに、再度、介護中に倒される事故があり、首肩の痛み、右手のしびれが増強。この1年、同様の事例は複数あり、骨折した人もあった。職場との話し合いもうまくいかず、結局退職することになった。

柴胡証の出現



軽い胸脇苦満



舌尖紅、白苔

柴胡剤を使用し症状軽減

以上の所見と、月経前後の不調と冷えを目標に抑肝散加陳皮半夏 7.5 g（朝、夕、眠前）と当帰四逆加呉茱萸生姜湯 5 g 分 2 に呉茱萸湯を頓服として処方し経過観察中。

柴胡証と呉茱萸湯証の関係を考える

●叔虎の呉茱萸湯 胃寒が強調されている

図のごとく冷氣心下に聚（あつま）るを覚え、
胸脇へ逆満して乾嘔、もしくは涎沫を吐し、頭項強痛し
手足厥冷するもの、呉茱萸湯の証なり



○文礼の呉茱萸湯柴胡証との重なりを強調

図のごとき、即ち呉茱萸湯の証なり
余この証を得ざること久し
苦心刻意して、近頃漸く詳らかにすることを得たり
柴胡を用いて治せざる者、間間この証あり
何となれば、胸脇苦満して
嘔已まざるものなればなり
柴胡の証にしてただ胸満するもの
是、呉茱萸湯の証なり



胃寒と肝胃不和

現代では古代ほど胃寒の呉茱萸湯証は多くない。

肝胃不和が増えている

- 古代の人は、労働の過多、栄養不良、冷えの影響で、胃寒による脾胃の機能低下から頭痛にいたる例が多かったとおもわれる
- 現代においては冷飲食による胃腸の冷えの例はあるものの、栄養失調は少なく、暖房がいきわたり、暖かい飲み物も自由にとれる環境にある
- その一方で運動不足、人間関係の複雑化、デジタル社会、スマホ普及によるテクノストレスにより、肝鬱に気滞による頭痛が増えており、片頭痛においても肝鬱の影響が多くみられるようになっている。

すなわち現代においては肝鬱気滞による痛みに対する疏肝解鬱
や肝血不足に対する補血の治療が必要となる場合も多い

呉茱萸は肝経にも作用するため（暖肝止痛）鑑別がむずかしい。
ストレスの関与や寒熱の問診が重要となる。

当帰四逆湯

(四逆 = 四肢厥逆 = 手足の冷え)

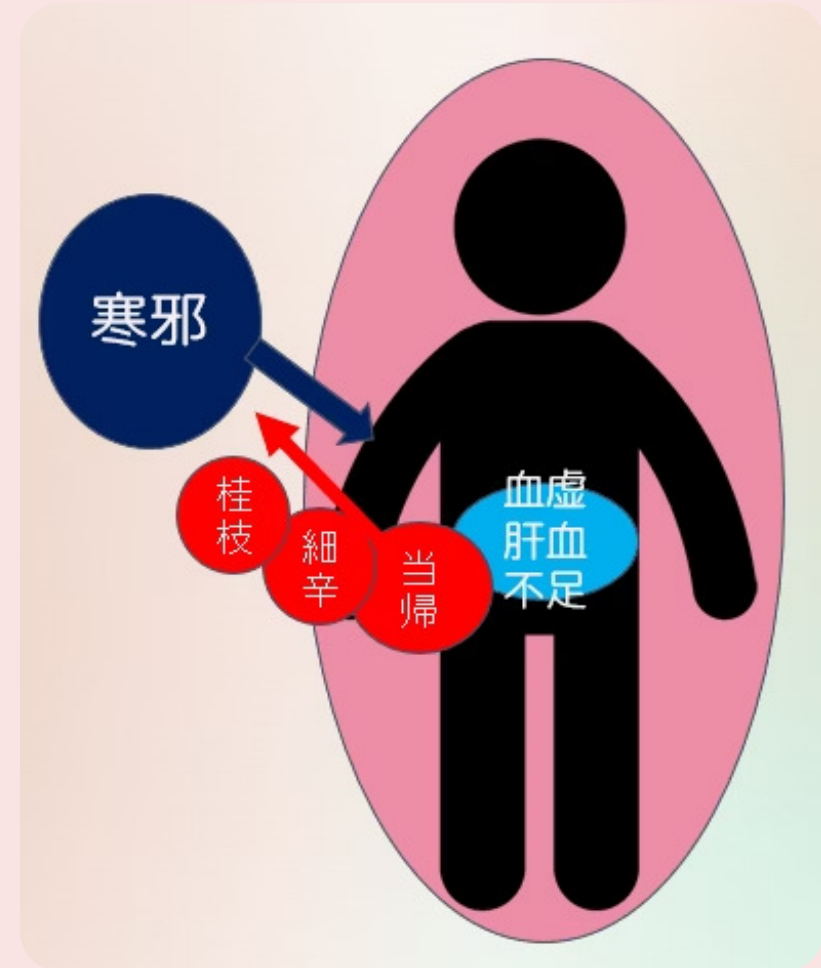
●叔虎の当帰四逆湯

図のごとく腹皮拘攣すること
桂枝加芍薬湯、小建中湯の腹状に似たり、
かつ、左の臍傍天枢（胃経）の上下に攣痛するものあること
当帰芍薬散、当帰建中湯に似たり
右の小腹腰間において結集するものあり
手足冷え、脈細して力なきもの
当帰四逆湯の証とす。



当帰四逆湯は外からの寒邪によって冷えた手足を暖める処方

主役は血分の冷えをとる
補血活血の当帰



当帰四逆湯

厥陰表寒の厥冷を治する

当帰を桂枝湯に乗せて表に運ぶ
生姜の代わりに細辛でさらに表に運ぶ
桂枝、当帰、木通で気血水を同時に巡らす



厥冷と厥寒

厥冷：中からの冷たさ：乾姜、附子

- さわったら冷たい
- 四逆湯：寒は中にありて下痢清穀するなり

厥寒：外からの寒さ：当帰、桂枝、細辛

- 自覚的に寒さを感じる
- 当帰四逆湯：外より来る気の寒きをおぼゆるなり

当帰四逆湯は胃のことは考えずただ手足を温めるために作られた処方

温中散寒の生姜を抜いて温腎、散寒解表の細辛を加えたところが処方のツボとなる

当帰四逆加呉茱萸生姜湯

お腹も手足も温める処方

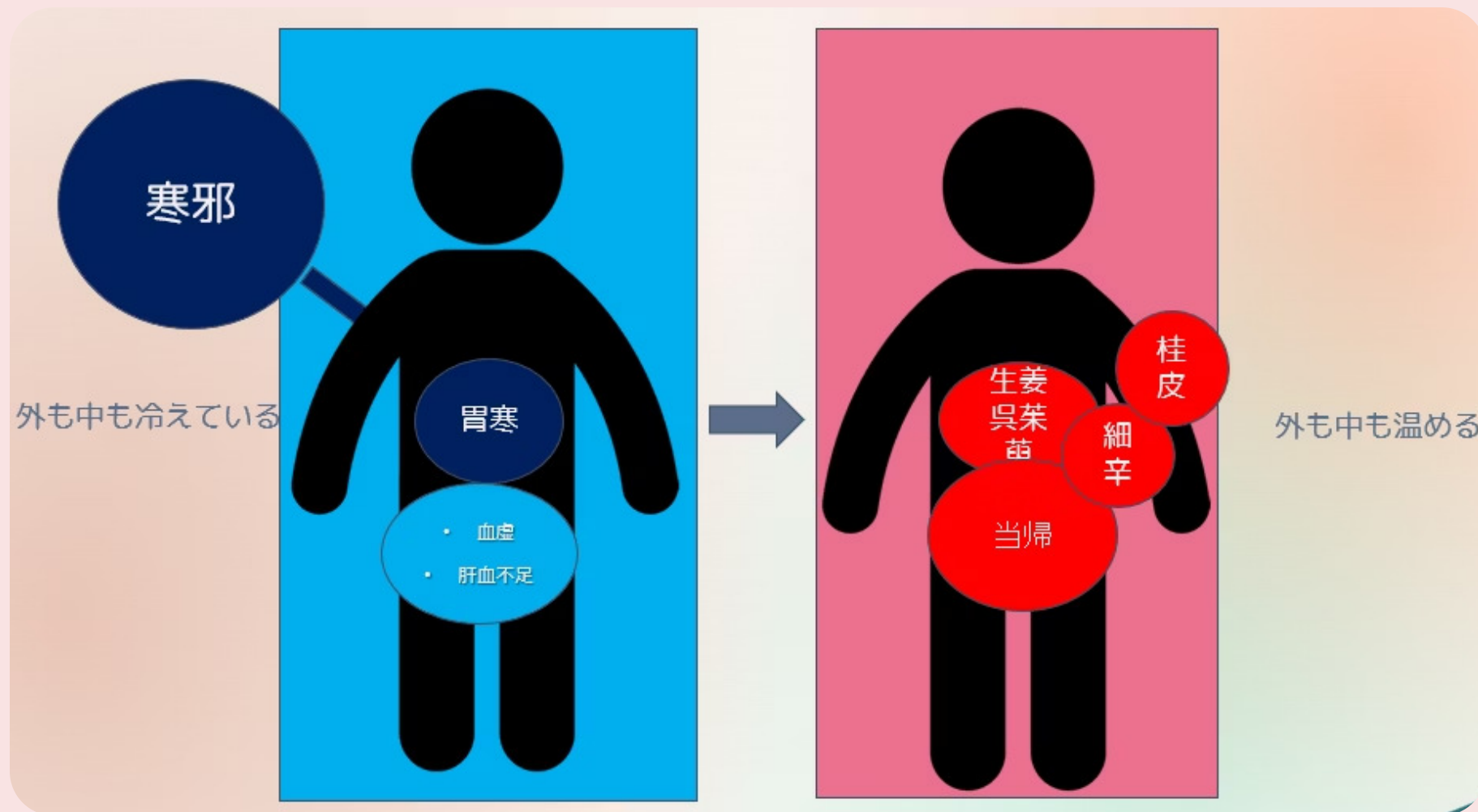
当帰四逆加呉茱萸生姜湯

桂枝、芍薬、甘草、大棗、木通、細辛（当帰四逆湯）

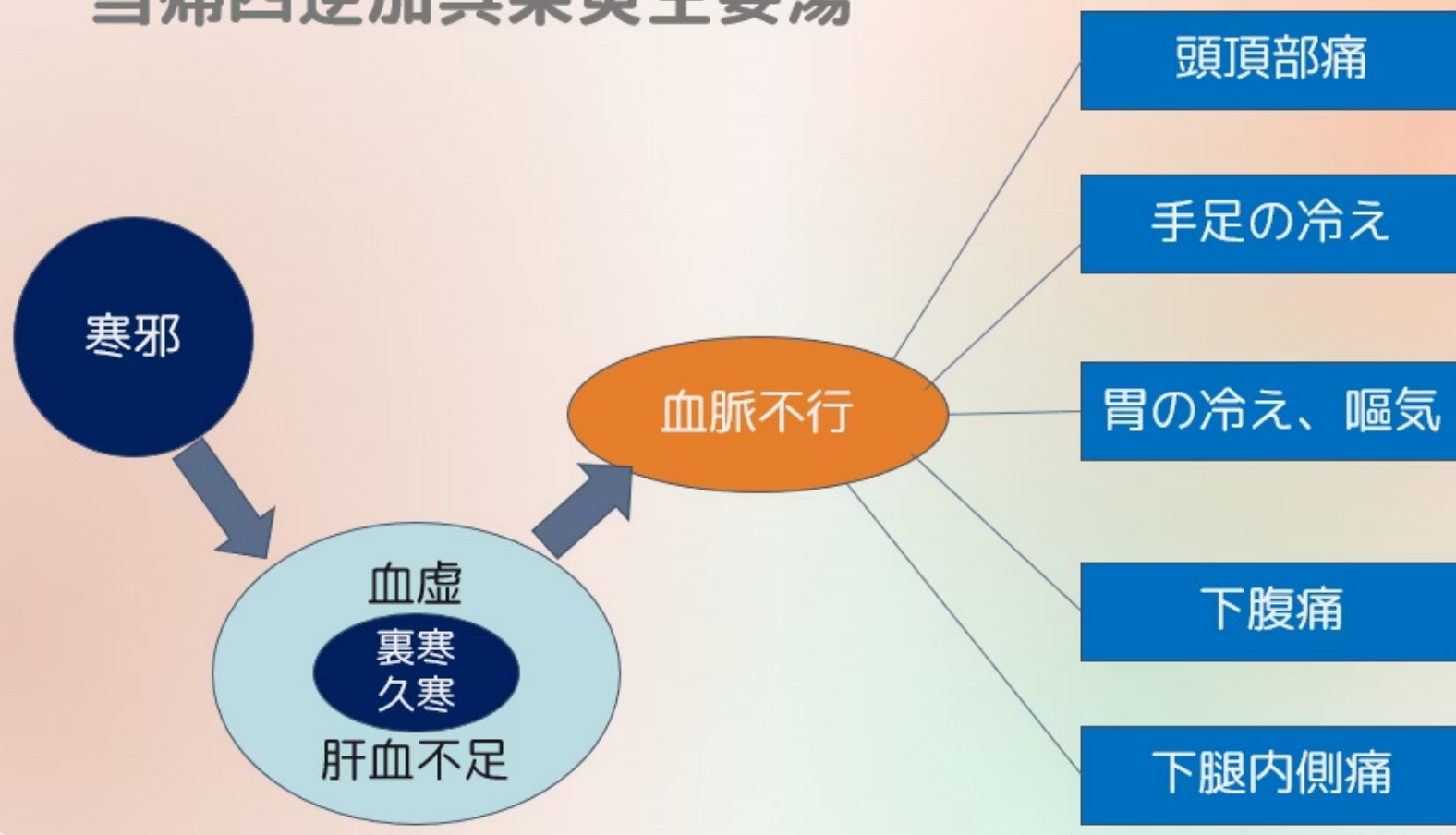
加呉茱萸、生姜

もしその人、内に久寒あるもの

寒疝、陰寒、疝気腰痛するものを治す



当帰四逆加呉茱萸生姜湯



疝気症候群

大塚敬節(1900-1980)

腹痛を主訴とするもので、その腹痛は下腹に起こって上にのぼる傾向があり、またその腹痛が上から下に波及し、さらに陰部にひきつれる傾向もある。

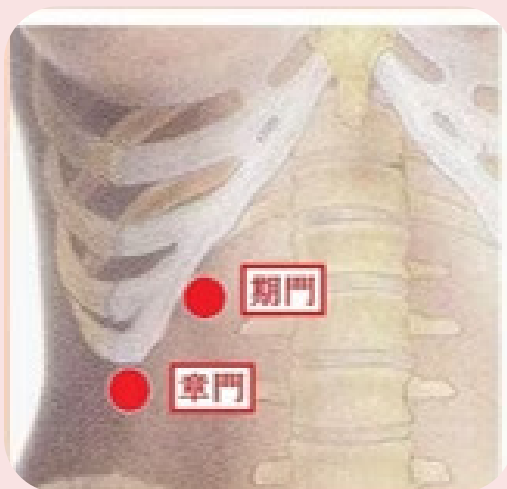
疝の原因として諸病源候論では、陰気が腹内に積み重なったところへ、外から寒気を受けて起こる、栄衛が不調で血気が虚弱になっているから風冷が腹に入って疝になる。

腹部手術の既往がある場合もある。

儒門事親では疝はすべて肝経の変であるとしている。

療治茶談

津田玄仙(1737-1809)



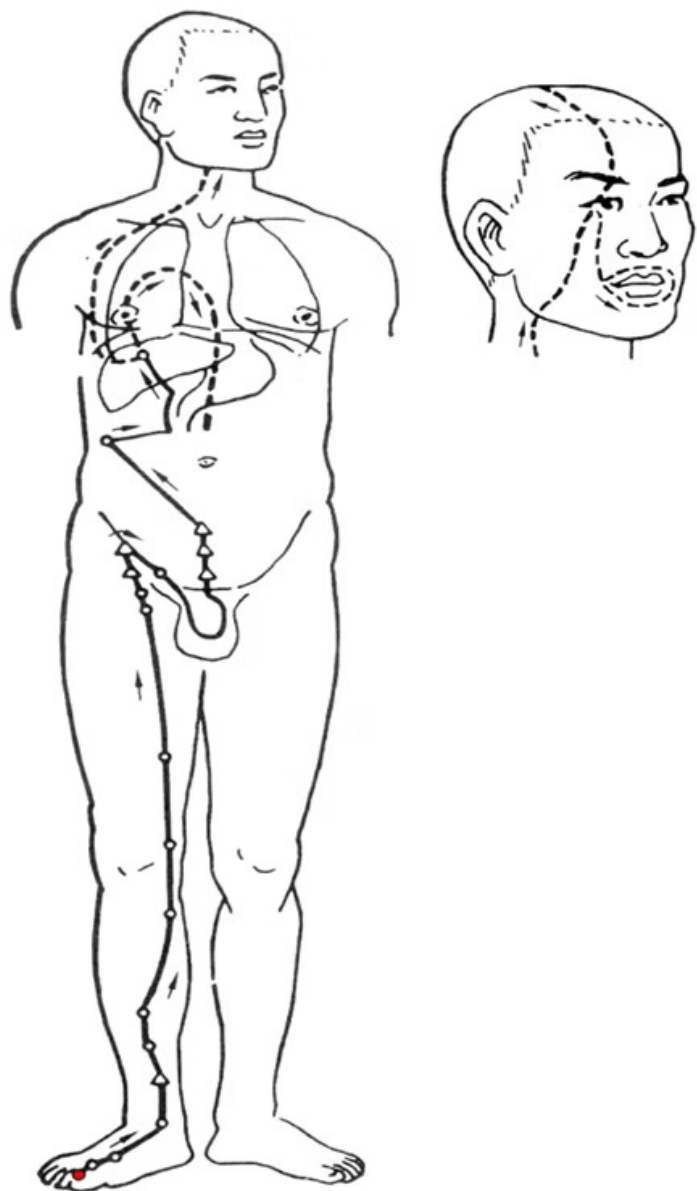
「年久しく疝を病む人、脾胃虚寒すれば、多くは反胃膈噎となる。腹中雷鳴して心下へ差し込み、少腹へ横すじかいに下り、腰に陥りて止まる。当帰四逆湯を用う。」愚案するにこれがまた久寒というべし。呉茱萸生姜を加わうを可とすべし。

呉茱萸を持ちうべきの腹状は、両の脇下章門の行引きつり、之を按して痛む。

反胃膈噎

- 反胃（ほんい、翻胃）
食物が胃に停滞してもたれ、嘔気、嘔吐するもの。
ひどい場合が朝食食べたものを夕に吐き、夕食食べたものを朝に吐く。
- 膈噎（かくいつ）
食物が胸につかえて吐く状態

当帰四逆加呉茱萸生姜湯は寒滯肝脈を治す
寒滯肝脈とは冷えにより肝経の流れが悪くなっておこる症候



当帰四逆加呉茱萸生薑湯は 厥陰肝経に効く

下は下肢内側から鼠径部、陰部、下腹部
中は胃や脇
上は頭頂部の冷えや痛みに応用される

大塚敬節口訣

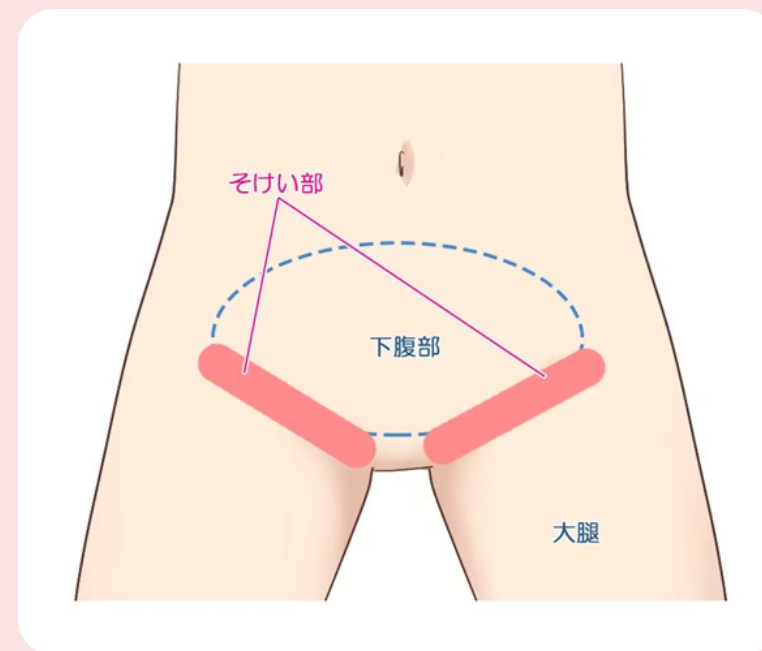
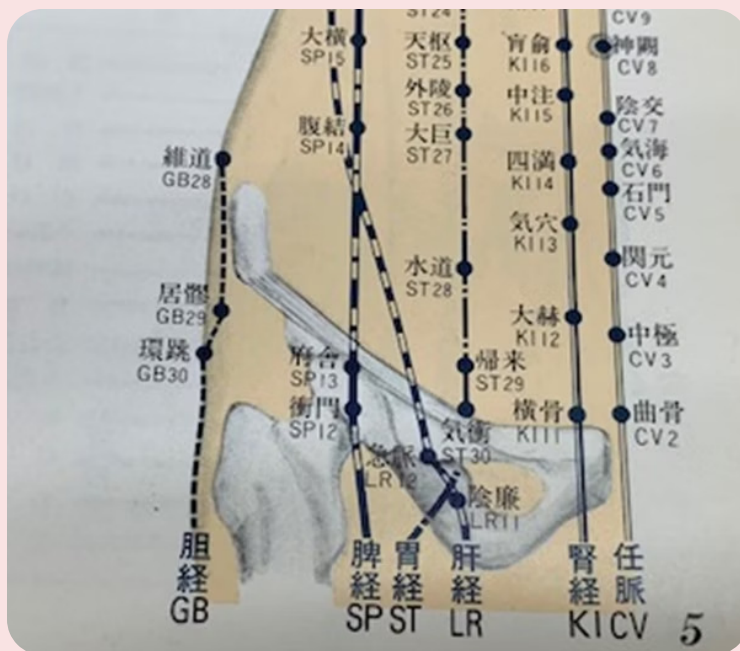
本方の腹痛は下腹から始まり、冷えると増悪し、それに腰痛、背痛、頭痛、四肢痛をともなう。

腹部は虚満、腹直筋緊張し、腹壁に抵抗あるが弾力に乏しく、ガスが充満しやすい。

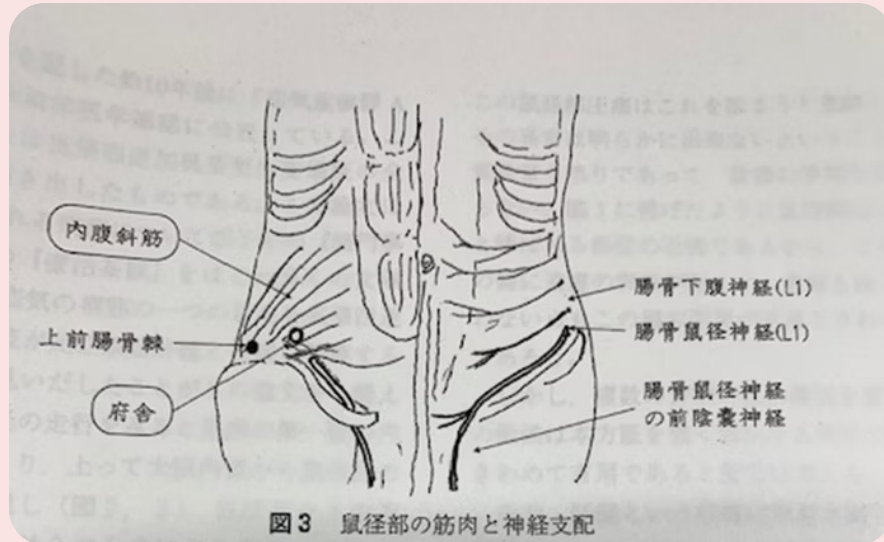
腹証の特徴に、下腹部で鼠径部の付近に、斜めに触れる索状物があり、敏感に圧痛を訴えるものがある
爪の周囲の赤黒い皮膚をみることがある。

寒滞肝脈の診断

下腹部においては鼠径部の圧痛や筋緊張、痛覚過敏も目標となる



鼠径部痛は肝経と脾系が関与 府舎は脾系で腹直筋外側に当たる



鼠径部の内腹斜筋は腸骨下神経、腸骨鼠径神経の運動枝の支配下にある。
鼠径部の皮膚知覚は腸骨鼠径神経の知覚枝により脊髄 (L1) に入力する。

(寺澤捷年)

当帰四逆加呉茱萸生姜湯の応用

下腹部痛、それが腰痛、四肢痛にまで及び、時に背部痛、頭痛を訴える

手足の冷え、下腹部の冷え、しもやけ（ひどいときは肩から足まで水が流れるよう。）

月経困難症、不妊

下腹部痛、鼠径部痛、背部痛、腰痛、頭痛、性交痛、性交後腹痛、下肢痛、膝痛、足底腱膜炎

脊椎管狭窄症、手根管症候群

泌尿器、生殖器の障害、尿漏れ、陰囊痛、前立腺疼痛

下痢、便秘

まとめ

- 芍薬甘草湯は陽である骨格筋、陰である腸管平滑筋のいずれの筋肉の拘攣も治す作用がある。
- 筋肉の緊張を主る肝血が不足し肝陽が上抗すると木克土で脾系である筋肉が拘攣することとなるが、陰経である肝経にも脾経にも作用し、肝血不足による筋の拘攣も治す。
- 呉茱萸湯は偏頭痛の痛みに頻用される。主薬の呉茱萸は胃寒を治し、弛緩した平滑筋の緊張を高める。
- 当帰四逆湯は桂皮、当帰、細辛によって体表を温め、四肢末端の冷えに応用される。一方、呉茱萸、生姜を加えた当帰四逆加呉茱萸生姜湯は胃寒を治すとともに呉茱萸の暖肝作用により肝経を巡る冷痛にも応用され、胃を温め、嘔気を治し、鼠径部の引きつるような痛みを治す応用範囲の広い処方となっている。